

日本における秦（羽田）姓と私

羽田 孜

この度は幸運なことに、徐福さんの郷里・贛榆において、徐福祭りに参加できただけでなく、徐福文化国際シンポジウムに出席し、講演のチャンスをいただきました。関係者の方がたにまず、心からの御礼を申し上げます。

あたえられたこの機会に、私は、自分の姓の変遷をたどると同時に、自身のルーツを考えてみたいと思います。

その起源は徐福の時代に

中国では、紀元前 10 世紀、周の時代すでに人びとは姓をもっていたそうですね。これは私にとって、大きな驚きです。なぜなら日本では、一般の人が姓をもつようになったのは、19 世紀の明治維新からのことです。それ以前から姓をもっていたのは、ごく一部の貴族や武士などだけでした。

私の場合、姓は羽田 Hata、名は孜 Tsutomu です。この羽田という姓は、もとを正せばじつは秦、秦の始皇帝の秦だったのです！ 日本語では、秦は shin ないし hata と読み、秦と羽田とは同じ発音なのです。

中国には「家譜」があるそうですが、日本には「家系図」があります。長野県の和田に、私とごく近い親戚の者で、羽田計樹さんがいます。今年 89 歳、とてもお元気です。中国でこれまで開かれた徐福のフォーラムやイベントにはほとんど参加していますので、この会場にもご存知の方がいらっしゃることでしょう。

長野の羽田家には、家系図があり、その冒頭には「秦始皇帝之遠孫秦川（河）勝苗裔」と書かれているのです！ われら羽田一族のルーツは、なんと二千数百年前、中国の秦代にあるというのです！ これは自分でも、にわかには信じられない話です

会場の皆さんは、日本にある徐福の墓のことはご存知でしょう。和歌山や三重、山梨などの各地に、いくつも徐福さんの墓や祠があるのです！ 複数の墓があるあたりに、古代日本における徐福一行の大きな影響を見てとることができます。

いちばん有名な徐福の墓は、和歌山県の新宮にあります。その墓には、「秦徐福之墓」と刻まれています。徐福さんは、「秦朝の人」だったのです。始皇帝の命を受けて、不老の霊薬を探しに船出した徐福の一行は、いわばロイヤル・ミッションだったのです。「秦」という御旗は、きわめて強力であり、それに逆らえる者などいなかったはずです。

日本史上にみる姓の変遷

さて羽田の家系図のトップにいる秦河勝ですが、6 世紀末～7 世紀初、日本の歴史上に実在した人物です。彼は当時の山背国（いまの京都府南部）を中心にして大きな勢力をもち、聖徳太子の側近として活躍しました。

聖徳太子（574~622）は、用明天皇の皇子として生まれ、女帝・推古天皇（聖徳太子の叔母にあたる）の摂政となり、当時の日本を中央集権化させ、法治化する基礎を作りました。遣隋使が何度も派遣され、百済や高句麗から高僧が招かれたのも、この頃のことです。

当時の日本の上層部には、仏法をめぐる対立があったようです。仏法に反対し、やや保守的な一派と、仏法を推進し、やや開明的な一派です。両者の争いが、ときに武力衝突にまで発展することがありました。聖徳太子は後者に属し、アジア外交に熱心であり、仏法を興隆させたことで有名です。

わが遠先の秦河勝は、こうした矛盾をはらむ状況のなかで、開明的な聖徳太子を擁護するという立場でした。以下、いくつかの現在にまで残る例をあげ、それを明らかにしたいと思います。603年のこととされますが、聖徳太子が1体の仏像を秦河勝にあたえ、寺院を造るように命じました。それが峰岡寺、いまの広隆寺です。この寺はかつて、秦寺とよばれ、その一帯の地名が太秦でした。現在、広隆寺には有名な弥勒菩薩半跏像（国宝）があり、その近くに秦河勝の夫妻の像があります。所在地は京都です。

奈良市の田原本に、その名も秦楽寺があります。その白い門構えからして、いかにも唐風を思わせます。本堂の釈迦像のすぐ横に、衣冠束帯という姿で、笏をもった秦河勝の像があります。その表情はいかにも厳粛で、「われは仏法の守護神なり」とでも語っているかのようです。この秦楽寺には秘仏ですが、歓喜天があるそうです。

大阪の八尾市でも、秦河勝を「発見」しました。大聖將軍寺の一帯は、聖徳太子や秦河勝らと、仏法に反対する勢力が激しく戦った場所です。「首級をあげた」とか「矢が当たった」などという戦跡が、いまでも残っています。大聖將軍寺の境内の説明には、勝者にも敗者にも多くの犠牲者があり、それらを等しく弔うために創建されたと書かれていました。この寺院の絵物語である「縁起」には、聖徳太子を中心にして、それを左右から守護する四天王が描かれています。その1人である秦河勝が、ひときわ大きく描かれているのは、この激戦における彼の役割りを明示しているものと思われまます。

ところで、日本の古代史には、「渡来系」とか「渡来人」という表現があります。渡ってきた人、という意味です。秦河勝もまた「渡来」です。その源が、中国大陸だったのか、あるいは朝鮮半島だったのか、その時代が、徐福の時代だったのか、聖徳太子の時代だったのか、正直な話、私にもよく分かりません。明らかなのは、わが羽田の一族の血脈の源がアジアの彼方にあり、それが日本に根づいたという歴史的な事実です。

そうした日本の歴史のなかで、秦という姓が羽田に変わる事件がありました。これに関しては羽田の家系図から、次のようなことが分かります。1554年（天文23年）、秦幸清が戦に破れて自決しました。いまの長野県でのことです。その後は秦を姓とすることが許されず、同音の羽田を姓としたのです。しかし、いまなお長野の羽田家には「秦陽館」という横額があり、わが一族の「秦」姓にたいする想いを示しています。

渡来の秦という一族は、きわめて優れた職能集団だったようです。治水・機織・醸造・芸能など、大陸ないし半島の先端的な技術や文化を、日本列島に伝えました。それはちょうど、徐福集団が農耕や冶金など当時の先進的な技術や文化を、縄文時代の日本に伝えたのと同じ構造です。日本には血脈のシンボルマークともいべき家紋があります。秦および羽田の家紋は「ちがい鷹の羽」であり、時空を越えて、同じ血脈であることを証明しています。

私自身の個人史を簡単に

ここからは、私、羽田孜のことを話します。曾祖父の羽田三郎は、長野県の和田村で村長などをした「政治家」でした。祖父の貞義は、福島県の師範学校（いまの福島大学）の校長となった「教育者」でした。わたしの父・武嗣郎は、東北帝国大学（いまの東北大学）を卒業するとすぐ新聞記者になり、ときに「政治的」な行動もしました。1937年、総選挙に長野県から出馬し、35歳の若さで国会議員となりました。その2年前、1935年（昭和10年）に私は生まれましたが、場所は東京です。

その私が生まれた東京の家は、じつは母の伯父の家でした。屋敷は大きく、広い庭には梅林があり、川が流れていました。しかし、戦況がだいに悪化し、東京にも空襲の危険があるというので、学童たちは地方へと移住することになりました。それが疎開です。私は長野県の上田市にあった坂井さんの家に疎開しました。

都会の子供は、腕よりは口舌に自信があります。地方の子供は、口舌よりは腕に自信があります。昔はそうでしたが、今もそうでしょうか？ 東京から長野に疎開した私は、よく「東京っ子」とからかわれて、負けると分かっているにもかかわらずケンカをしました。ケンカをすれば、それからは仲良しになりますよね。やがて長野の腕白たちと野山をかけ回り、小川で遊ぶようになり、私の体力も平均以上となりました。とは言え、当時の日本では、大人も子供もきわめて貧しい食事しかできず、お菓子などは無縁でした、ほとんど。

敗戦（1945年）後、父の武嗣郎は公職から追放されましたが、上田市で新聞事業を起こすなどして、元気に活動していました。そんな父親の姿を見ていた小学生の私は、国語の時間に、

「これからは、平和な国、国民として戦争のない世界をつくろう。紛争のない世界を建設しよう」という作文を書き、それが校内で放送されました。

「孜くんは、さきざき父のあとを継ぐのだろう」と周囲の大人たちは語っていたようですが、私には、もっと大きな夢がありました。それは、

「世界連邦をつくり、その盟主になる！」というものでした。

やがて父が政界に復帰し、東京にもどる日がやってきました。私も自動的にそうなり、成城学園という高校に通うようになりました。1952年（昭和27年）のことです。さらに成城大学の経済学部に進みます。じつは小学や中学からのことなのですが、私は、交友関係がひろく、誰とでもよく話し、困った者がいれば面倒をみて、友だちの家によく泊まりました。そんな私に、「伝書鳩」というニックネームがついたほどです。

この「伝書鳩」は大学生になっても健在で、同窓会の名簿づくりでは中心的な役割りを演じました。また、ハンガリーから亡命してきたF・アジャゴスさんが成城大学に留学しようとした際、その受入れに関して、学長を説得したのは大学3年生だった私です。ただし、それには「必要な資金を、君たちが集める」という条件があり、アジャゴスさんの留学資金を集めるために、仲間たちと奔走もしました。大学時代の私自身は、勉学よりも活動に忙しかった、というのが実感です。勉学として収穫があったのは、ゼミで、開発途上国の開発理論について勉強したことくらいでしょう。

こうした小学生から大学までの「伝書鳩」的な集団行動は、思うに、広範かつ堅固な人脈づくりに役立ったかも知れません。こうした人間関係の構築は、その後の人生で、政治家としての人生を歩むうえで、大きな財産となったようです。大学を卒業してからのことは、時間の関係もあり、箇条書きのようなものになります。

大学卒業とともに、1958年（昭和33年）、小田急バス（株）に入社。十年間、普通のサラリーマンをやり、車掌も、定期券売りもやった。

1969年（昭和44年）、父が病で倒れて5年後、周囲から説得され、長野3区から出馬、初当選して衆議院議員となる。所属政党は自民党。

その後、農林水産大臣や大蔵大臣、外務大臣などをへて、1994年（平成6年）、第80代内閣総理大臣となる。所属は新生党。この前後から日本の政党は離合集散をくりかえしますが、私は、新進党副党首、太陽党党首、民政党代表をへて、現在は民主党最高顧問をしています。

東アジアの共存と調和

ここまでは漢詩にならない、起（姓の起源）承（歴史の変遷）転（個人の履歴）と話してきましたが、いよいよ「結」に入る時間となりました。

私たち羽田のルーツに関しては、すでに「起」のところで家系図を紹介しました。それには、「秦始皇帝之遠孫」とありました。じつはもう1つ、わが羽田のルーツに関する話があります。すなわち、秦の始皇帝が派遣した集団の一部の末裔に、秦武文という人物がおり、彼は後醍醐天皇（14世紀）に仕え、その秦武文の子孫が戦国時代（16世紀）に信州（いまの長野県）にやってきた秦幸清だ、というものです。

16世紀の秦幸清がわが羽田の祖先であることは間違いありません。ところが、徐福は紀元前3世紀、秦河勝は6世紀、秦武文は14世紀の人間です。ここで正直な話をすれば、それ以前の秦河勝や徐福との血脈の関連については、残念ながら物的証拠がなく、よく分かりません。それらを直線的につなげるのは、ある意味では無理があり、いささか非論理的なことかも知れません。

しかしながら、私は、日本で徐福の話を知ったときに、またこうして中国に来て、徐福ゆかりの地を訪れ、皆さんと面談する時、思わず、自分の血が熱くなるのを覚えます。わが遠祖はやはり、アジア大陸のあなたから、あるいは船団を組み、あるいは朝鮮半島を伝わって、東方に渡来して、日本列島で生存をつづけてきたのだと、そう実感するのです。これはあくまでも主観的なことですが、私は、自分の感性を信じたいと思います。

徐福さんの足どりを見ると、中国、韓国朝鮮そして日本です。中国徐福会の初代会長をされた李連慶先生の言葉を借りれば、徐福は中国で生まれ、韓国を経由して、日本に到り、そこで死にました。この東アジアの3国には、過去の一時期、不幸な歴史がありました。ひとりの日本人として、私はこれを重く受けとめます。

同時に、この3国が共有する話題として、徐福さんのことを想起すれば、この歴史的な遺産を、これまで以上に大切にしなければなりません。互いに学びあい、平和的に共存し繁栄するという徐福精神を発揮して、まずは東アジアにおいて相互に調和するという関係を構築していこうではありませんか！

これで私の話を終わります。謝謝大家。

2007・10・26 中国・贛榆